

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ドイツ語における「SEIN + P. II」構造の解釈とSOURCE指向性について：日本語の「動詞語幹 + ている」構造との対照研究
Author(s)	野上, さなみ
Citation	ニダバ, 28 : 118 - 127
Issue Date	1999-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048052
Right	
Relation	



ドイツ語における「SEIN + P. II」構造の解釈と SOURCE 指向性について

— 日本語の「動詞語幹 + ている」構造
との対照研究 —

野上 さなみ

1. 目的

現代ドイツ語では動詞seinと基本動詞の過去分詞（以下P. IIと略す）を組み合わせて、先行する出来事の状態を前提とする（結果）状態を叙述する、いわゆる結果相構造¹⁾を作ることができる。RAPP(1995:S. 180)によればこの結果相構造は、基本動詞の語彙的な意味構造 (lexikalische semantische Struktur) の中にある状態陳述 (Zustandsprädikat) を取り出すことによってできあがる表現形式である。このSEIN+P. II構造は、基本動詞によっては同時に完了の解釈が可能であったり、完了の解釈は許されるが結果相の解釈が認められなかったりする：

- 1) 結果相および完了の両解釈が可能なSEIN+P. II構造
 - a. Das Schiff ist seit/vor 86 Jahren im Meer versunken.
船が86年前から/86年前に海に沈んでいる。
 - b. Die Blume ist seit gestern/gestern verwelkt.
花が昨日から/昨日枯れている。
- 2) 完了の解釈は可能だが結果相の解釈は不可能なSEIN+P. II構造
 - a. Der Brief ist *seit gestern/gestern gekommen.
手紙が昨日から/昨日来ている。
 - b. Der Apfel ist *seit gestern/gestern gefallen.
リンゴが昨日から/昨日落ちている。

例文1)では結果相および完了の両解釈が受け入れられることが、継続を表す副詞句seit- (...以来/から) 及び時点を表す副詞句gestern (昨日) やvor- (...前に) 両方と共起できることからわかり、また例文2)では時点を表す副詞句としか共起できないことから完了の解釈しか受け入れられないことがわかる。本論文では自動詞の中でも、唯一の項を深層構造における内項として持ついわゆる「非対格動詞」²⁾を基本動詞とする SEIN+P. II構造と日本語の「動詞語幹+ている」構造（以下「ている」構造と略す。）を対照³⁾し、両者の解釈を決定する要因を明確に示した上で、結果相/完了の両解釈のうちどちらが優先的

に選ばれるかという傾向が両言語で違うことを指摘する。さらにこの傾向の原因を、特定の概念 (Agentivity/SOURCE) に対する指向性が各言語で異なるという事実が個々の言語表現形式の解釈に影響を与えるという、言語類型学的な視点から結論づけることが本論文の最終的な目的である。

2. 叙述を受ける項のPatientivityと両構造の解釈

上記例文の基本動詞4つに共通することは、第一にすべて「状態変化を表現する動詞である」ということである。結果相構造はそれによって叙述される結果状態を作り出す「先行する出来事＝状態変化」の存在を前提とする構造なので、この性質は結果相構造の基本動詞となる動詞が備えているべき必須の条件である。状態変化が起こる瞬間を、動詞が表現する出来事が成立するために必ず達成されねばならないクライマックスと考えると、結果相構造の基本動詞はまずTelicな動詞でなければならない、とすることができる。基本動詞のTelicityを、叙述を受ける項との関連で捉えると、動詞の表す出来事においてこの項が必ず状態変化を被っていることがわかる。第二にこの変化は他の項からの影響を受けることなく自律的に起こる変化である点も共通している。1)と2)の基本動詞を区別するのは「変化の進行の仕方」の相違である。1)の基本動詞が表現する状態変化は漸次進行するもので、このことはNEDJALKOV & JACHONTOV(1988)が示しているように、いくつかの副詞句 nach und nach/allmählich (次第に) と共起可能であることによって確認できる。これに対して2)の基本動詞の表現する状態変化は、これらの副詞句と共起できないことから明らかかなとうり、漸次進行するものではない：

- 3) a. Das Schiff versank nach und nach. 船が次第に沈んだ。
- b. Die Blume verwelkte nach und nach. 花が次第に枯れた。
- c. *Der Brief kam nach und nach. *手紙が次第に来た。
- d. *Der Apfel fiel nach und nach. *リンゴが次第に落ちた。

この「状態変化が漸次進行する」という性質をDOWTY(1991)に従って「この状態変化はIncrementalityを持つ、incrementalである」という表現を用いることにする。すなわち、叙述を受ける項が状態変化を被り、かつこの変化がIncrementalityを持っていれば、SEIN+P. II構造は結果相の解釈を受け入れることが可能であると言える。これらふたつの性質はDOWTY(1991)が、特定の項が持つ性質によってこの項をProto-agentあるいはProto-patientとして認めるための基準となるProto-patient-propertiesの中の第1番目と第2番目の性質に該当する：

- 4) DOWTY(1991:S. 572)によるProto-patient-properties：
 - 1. undergoes change of state：状態変化を被ること。
 - 2. incremental theme：状態変化が漸次進行すること。
 - 3. causally affected by another participant：

状態変化が他の項に引き起こされること。

4. stationary relativ to movement of another participant :

他の項に比べて動きが少ないこと。

- (5. does not exist independently of the event, or not at all :

自己の存在が出来事に依存すること、あるいは全く存在しないこと。)

さらに、他動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造を見てみると、この構造の解釈が叙述を受ける項の持つProto-patient-propertiesに依存していることがより明らかになる :

- 5) a. *Die Nachricht ist (von den Studenten) erfahren.

そのニュースは (学生達に) 知られている。

- b. *Das Geschenk ist (von meiner Mutter) bekommen/erhalten.

贈り物は (母に) 受け取られている。

- 6) a. Der Schlüssel ist gefunden.

鍵はみつけられて (みつかって) いる。

- b. Die Nachricht ist den Studenten mitgeteilt.

そのニュースは学生達に伝えられている。

5)、6)いずれの基本動詞も状態変化を表現しているが、この変化はIncrementalityを含まないので、叙述を受ける項は4)で挙げた性質のうち第1番目の性質を持つが第2番目の性質は持ち合わせていない。また5)の基本動詞が表現する出来事はいずれも、副詞句 von-によって表される動作主によって「引き起こされる」とは言いがたく、すなわちdie Nachrichtおよびdas Geschenkが被る状態変化は他の項からの影響を受けて生じるものとは言えない。よって5)のSEIN+P. II構造において叙述を受ける項は、4)の第3番目の性質を持ち合わせていないということになる。これに対して6)の場合、der Schlüssel及びdie Nachrichtが被る状態変化は、別の項からの影響を受けて生じる、すなわち「別の項に引き起こされる」という解釈が可能である。よって6)において叙述を受ける項は4)の第3番目の性質を持ち合わせていると言える。以上の考察から、ドイツ語のSEIN+P. II構造が結果相の解釈を受け入れるためには、Proto-patient-propertiesのうち最低二つ (第1番目と第2あるいは第3番目) を備えていることが条件であるということになる。以下、特定の項が備え持っているProto-patient-propertiesを「Patientivity」と呼ぶことにする。

表現される状態変化がIncrementalityを持たないタイプの非対格動詞を、1. 移動を表す動詞、2. それ以外の動詞に分類し、基本動詞の意味とSEIN+P. II構造の解釈の関係をさらに見ていこう :

- 7) 1. 移動を表す自動詞 : gehen(行く), ankommen(来る/着く), rollen(転がる),
sinken (沈む), fallen(落ちる), kugeln(転がる) など。
2. それ以外の自動詞 : zerspringen (割れる/碎ける), sterben (死ぬ) ,

aufwachen (覚める), platzen(割れる/はじける), など。

7)-1.の自動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造では結果相の解釈が受け入れられにくかったり不可能だったりし、7)-2.の自動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造では結果相の解釈が不可能であるのに対して、完了の解釈は、どちらのグループの自動詞を基本動詞としても問題なく受け入れられる：

8) a. Matthias ist ?seit Montag/am Montag nach Hamburg gegangen.

Matthiasが 月曜日から/月曜日に Hamburgへ行っている。

b. Der Brief ist *seit gestern/gestern angekommen.

手紙が昨日から/昨日来ている。

c. Das Glas ist *seit gestern/gestern zersprungen.

グラスが 昨日から/昨日 割れている。

d. Der Luftballon ist *seit gestern/gestern geplatzt.

風船が 昨日から/昨日 割れている。

7)-1.と2.に意味論的に対応する日本語の非対格動詞を基本動詞とする「ている」構造では、ドイツ語の場合とは逆に、結果相の解釈は抵抗無く受け入れられるが、完了の解釈が受け入れられるためには時点を表す副詞句などの特定の文脈が整っていることが要求される⁴⁾。以上の考察から、非対格動詞を基本動詞とする両構造の解釈とPatientivityの間の関連を次のように結論づけることができる。ドイツ語のSEIN+P. II構造の場合、叙述を受ける項のPatientivityが十分に高い時にのみ結果相の解釈が受け入れられ、そうでなければ結果相の解釈は不可能あるいは受け入れられにくい。その際決め手となるPatientivityは、基本動詞が表現する状態変化のIncrementalityである。一方、完了の解釈は、この状態変化のIncrementalityとは無関係に常に保証されている。日本語の「ている」構造の結果相解釈は、ドイツ語のSEIN+P. II構造の結果相解釈ほど、叙述を受ける項のPatientivityの高さを要求しない。たとえ叙述を受ける項が、状態変化を被るといふ⁴⁾の第1番目のPatientivityしか備えていなくても、結果相の解釈は常に保証されており、さらに特別な文脈が与えられない限り、完了よりも結果相の解釈が優先的に選ばれると言える。

3. Agentivityへの指向性の有無 (DO-言語とBECOME-言語) と両構造の解釈

第2節で、SEIN+P. II構造では完了の解釈がより保証/優先され、「ている」構造では結果相の解釈がより保証/優先されるという傾向の違いがあることを示し、それを叙述を受ける項の持つPatientivityと関連づけた。この傾向の違いを本節では、両言語におけるAgentivityへの指向性の強さと関連づけて論じることとする。IKEGAMI (1978) および池上 (1981) は、言語表現において語彙的、文法的にAgentivityの概念を強調しようとする言語をDO-言語、逆にAgentivityの概念を言語表現の中での目立たないように抑制しようとする言語をBECOME-言語として、英語をDO-言語に、日本語をBECOME-言語に分類している。

IKEGAMI/池上自身が挙げている具体的な分類基準は、1. 名詞句のTopicalization (主題化) の持つ効果の違い (BECOME-言語では名詞句のAgentivityを抑制する効果を持つ)、2. 所有関係の表現の基本が日本語では本来「存在」を表現するBE動詞を用いた形式であるのに対して、英語では所有者を主語とするHAVE動詞を用いること、3. BECOME-言語としての日本語にはAgentivityをなるべく目立たないようにするための「...ことになる」や「...のだ」という形式が整っていること、4. 状態変化を表現する際に英語ではAgentivityがより顕著に現われる移動の動詞が転用されるのに対して、日本語ではこの転用が通常不可能で、becomeに相当する「なる」をはじめとする、状態変化そのものを表現する非対格動詞が用いられること、などである。これらの基準に従えばドイツ語もDO-言語に分類される。それ以外にもHASPELMATH(1993)による、同一の状態変化を表現するinchoative/causativeの動詞のペアにおける派生の方向に関する研究結果からも、ある状態変化を動詞として語彙化する際に、ドイツ語ではAgentの存在を前提とする状態変化の捉え方が基本であるのに対して、日本語ではAgentによって引き起こされるかAgent無くして自律的に起こる変化であるかといった点に関しては中立的な状態変化の捉え方が基本であることが確認され、この事実もドイツ語をDO-言語に、日本語をBECOME-言語に分類する根拠として有効であろう。

Patientivityと同様に、AgentivityもDOWTY (1991:S. 572)に従って以下のように5つの性質に分類する：

9) Proto-agent-properties:

1. Volitional involvement in the event or state:

意図をもって出来事、状態に参加すること。

2. sentience (and/or perception): 知覚、感覚力があること。

3. causing an event or change of state in another participant:

出来事、または他の参加者の状態変化を引き起こすこと。

4: movement (relative to the position of another participant):

動きがあること (他の参加者に対して)。

(5: exists independently of the event named by the verb:

その存在が、動詞が表現する出来事に依存していないこと。)

まず完了と結果相の意味の違いを、出来事時点(E)と設定時点(R、本稿の対象となっている両構造においては特別な文脈が与えられない限り発話時点Sが兼ねる)の関係をを用いて明確にしてから、SEIN+P. II- および「ている」両構造が完了の解釈を受ける時には、叙述を受ける項のAgentivityが強調され、結果相の解釈を受ける時にはこの項のAgentivityは逆に抑制され目立たなくなることを示したい。完了(Perfect)の核となる意味をEHRICH(1992)に従って、「設定時点(R)に対する出来事時点(E)の先行性(E<R)」とする。完了では、動詞が表現する出来事によって必然的に引き起こされる結果状態(E/res)が必ず

しも設定時点Rまで継続する必要はない。これは、10)-a. が示すように、結果状態の設定時点における継続を打ち消す文脈が後に続いて、文章が文法的であることで確認できる：

10) a. Peter ist vom Stuhl gefallen, aber er rennt wieder im Garten herum.

Peterは椅子から落ちた、でもまた庭を駆け回っている。

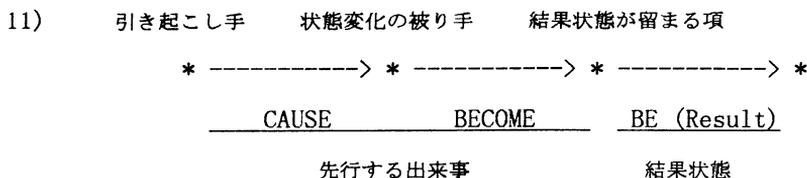
これに対して結果相では、結果状態の設定時点における継続を否定する文脈が後に続くと、文章全体が非文法的になってしまう：

10) b. *Das Fenster ist geöffnet, aber Peter hat es wieder geschlossen.

*窓が開いている、でもPeterがその窓を再び閉めた。

このように結果相では、結果状態が設定時点において必ず継続していなければならないので⁵⁾、結果相の意味を「結果状態が設定時点において必ず継続していること (E/res:R)」とする。完了と結果相の間の意味の相違は、DAHL(1985), BYBEE & DAHL(1989)が主張するように、先行する出来事とそれによって引き起こされる必然的な結果状態のどちらに重点を置くかという違いとして捉えることができる。完了では「出来事時点と設定時点」の関係が、結果相では「結果状態と設定時点」の関係が取り扱われていることからそれは確認できる。

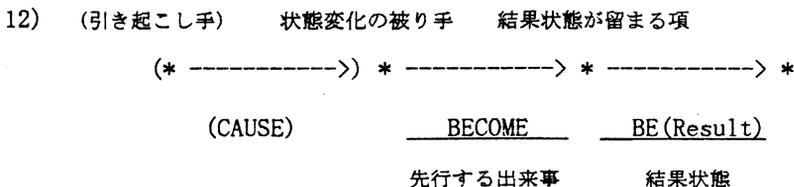
7)-1.の自動詞は、唯一の項が自らの動きをコントロールできるケースとそうでないケースに分類することができる。前者の場合、LEVIN & RAPPAPORT HOVAV(1992)に従ってこの項をProtagonist⁶⁾と呼ぶことにする。具体的な例を挙げれば、der Gast kam an (客が来た)ではder GastはProtagonistであるが、das Paket kam an (小包が来た)ではdas PaketはProtagonistではない。このProtagonistである項は、場所の変化という一種の状態変化を被ると同時に、自らがこの状態変化の引き起こし手でありかつ動きを伴うため、4)で挙げた第1番目のPatientivityと同時に、9)で挙げたAgentivityのうち第3番目と第4番目の性質も持ち合わせている、すなわちAgentとしての側面とPatientとしての側面の両方を備えていると言うことができる。Protagonistを唯一の項として持つ非対格動詞の語彙的な意味構造を先行する出来事と結果状態とに分解し、唯一の項のこの両側面との関係を図式化すると11)のようになる⁷⁾：



典型的他動詞では状態変化の引き起こし手と被り手（結果状態が留まる項でもある）が二つの項に分化しているのだが、非対格動詞ではこの二つの側面が一つの項に融合された形になる。つまり「引き起こし手(Protagonist)=状態変化の被り手=結果状態が留まる項」ということになる。移動を表す非対格動詞の場合、移動そのものが状態変化(BECOME)の段

階に相当する。「引き起こし手」および「動きを持つもの」としての側面は結果状態よりも先行する出来事に直接そしてより強く関与していることがわかる。完了と結果相を比較すれば、先行する出来事により重点を置くのは完了の方なので、7)-1.の移動の動詞のProtagonistが持つAgentivity（引き起こし手としての側面および動き）がより強調されるのは、SEIN+P. II構造全体が完了として解釈される時であり、逆にSEIN+P. II構造が結果相として解釈される場合にはProtagonistのAgentivityは強調されないと言うことができる。D0-言語としてのドイツ語においては、基本動詞の唯一の項すなわちSEIN+P. II構造で叙述を受ける項がProtagonistである場合には、この項の持つAgentivityをより強調する手段として、完了の解釈が優先される傾向があり、BECOME-言語としての日本語ではこのAgentivityをなるべく抑制しようとする働きがあるために、「ている」構造においてはこれがより目立たない結果相の解釈が優先される傾向があると考えることができる。7)-1.の自動詞で、唯一の項がProtagonistでないものを基本動詞とする場合にも、一種のAgentivityとしてのこの項の動きを強調するためにSEIN+P. II構造では完了の解釈が優先され、「ている」構造ではこの項の動きをより目立たなくするために結果相解釈が優先されると考えることが可能である。

しかし7)-2.の自動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造に関しては、この説明では問題が生じる。なぜなら、これらの基本動詞の唯一の項には、特に強調されるべきAgentivityが認められないからである。sterben（死ぬ）、aufwachen（覚める）といった動詞は、唯一の項が生命体であることを前提とし、これを9)であげたAgentivityのうち1.と2.の意味論的な前提として考えても、完了の解釈がこの事実をより強調する効果をもつとは言えない。つまり、これらの動詞の唯一の項はProtagonistではない、つまり自分自身が被る状態変化の引き起こし手としての側面を持たないために、構造全体が完了の解釈を受けることによって先行する出来事がより強調されると、状態変化を被るというPatientとしての側面がむしろ強調されてしまい、「完了の解釈が優先されるのは、Agentivityを強調するためである」という主張は、これらの自動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造に関しては無効である。この場合の自動詞の語彙的な意味構造と唯一の項が担う役割を図式化すると12)のようになる：



括弧に入っている「引き起こし手」としての側面とCAUSE（引き起こし）の部分は動詞の意味構造には含まれておらず、その外部にのみ想定可能である。このように強調するべきAgentivityが無いにもかかわらず、完了の解釈しか認められないSEIN+P. II構造を説明するために、「完了の解釈において、結果相の解釈よりも強調され、かつAgentivityを含む上

位概念」を設定する必要がある。つまりD0-言語を、Agentivityのみでなくこの上位概念を強調しようとする傾向のある言語としてとらえ、BECOME-言語をこの上位概念全般を抑制しようとする傾向を持つ言語として考えれば、7)で挙げた両方のタイプの動詞のどちらを基本動詞とする場合にもSEIN+P. II構造と「ている」構造の、結果相か完了かという解釈に関する傾向の違いを問題なく説明できるはずである。そういう上位概念としてSOURCEを提案したい。

4. Agentivityの上位概念としてのSOURCE

CLARK & CARPENTER(1989)は、空間における関係を表現する形式が、様々な言語において非空間的關係を表現するのに用いられる事実を指摘し、現代英語においては「動きの出発点」と多くの非空間的關係が同一の前置詞fromを用いて表現されること、および子供が言語習得の過程で多くの非空間的關係を表現するのにやはりfromを使用すること、この2点から「空間、時間的出発点」をはじめとする様々な関係を総括する、概念上の上位範疇としてSOURCEを仮定している。CLARK & CARPENTERによる、SOURCEの概念に含まれる下位範疇の例を以下に示す：

13) SOURCE⁸⁾：

1. Starting point in time and location: 空間、時間における出発点
2. Agents and natural forces (instigator): Agent および 自然力 (引き起こし手)
3. Cause⁹⁾: 効果や結果の原因
4. Possessor: 所有関係における所有者

ドイツ語でもこれらは同一の前置詞vonを用いて表現されるので、SOURCEとして一つの範疇を作っていると考えることができる。13)で挙げた1.-4.に沿ってドイツ語の例を示す：

14) 1. Von Japan bis nach Deutschland fliegt man ca. 12 Stunden.

日本からドイツまで約12時間飛ぶ(飛行機で約12時間かかる)。

2. Der Kuchen wurde von meiner Mutter gebacken.

このケーキは私の母によって焼かれた。

3. Er ist müde von der Reise.

彼は旅行で疲れている。

4. Das Buch ist von mir.

その本は私のものだ。

12)で示した意味構造から明らかとなうり、7)-2.の自動詞は個体としての引き起こし手は意味構造の中に含まないが、先行する出来事(状態変化)は結果状態の原因として捉えることが可能であり、一種のCauseとして機能していることがわかる。D0-言語にはAgentivityのみにとどまらず、これを含むSOURCEという範疇全体を際立たせようとする傾向があると仮定すれば、7)-2.の自動詞を基本動詞とするSEIN+P. II構造においては、叙述

HOVAVでは、移動の方向を必ず表現するいわゆる direction verb は、この基準で分類されていない。7): この図式はCROFT, W. (1991): Syntactic categories and grammatical relations. The cognitive organization of information. Chicago. の動詞の Idealized Cognitive Model に由来するものである。*が参加者を、--->が参加者の間のエネルギーの流れの方向を示している。8): ここに示した以外に、「比較の基準(Standard of comparison)」なども挙げられているが、それらについては本論では言及しない。9): 動詞の意味構造中の「引き起こし」の概念は大文字でCAUSEとし、これと区別するために、「原因」は小文字を用いて「Cause」とする。

7. 参考文献

- Bybee, J. & Dahl, Ö. (1989): The creation of tense and aspect system in the language of the world. In: Studies in Language 13-1, S.51-103.
- Clark, E. V. & Carpenter, K. L. (1989): The notion of source in language aquisition. In: Language, Volume 65, Number 1.
- Dahl, Ö. (1985): Tense and Aspect Systems. Oxford.
- Dowty, D. R. (1991): Thematic proto-roles and argument selection. In: Language 67, S. 547-619.
- Ehrich, V. (1992): Hier und Jetzt. Studien zur lokalen und temporalen Deixis im Deutschen. LA 283. Tübingen.
- Haspelmath, M. (1993): More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In: Comrie, B. & Polinsky, M. (eds.): Causatives and Transitivity. Amsterdam/Philadelphia. S. 87-120.
- Ikegami, Y. (1978): DO-Language and BECOME-Language. In: Dressler, W. U. & Meid, W. (eds.): Proceedings of the 12. international congress of linguistics. Innsbruck. S. 190-194.
- 池上嘉彦(1981): 「する」と「なる」の言語学. 東京.
- 工藤真由美(1995): アスペクト、テンス体系とテキスト. 現代日本語の時間の表現. 東京.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1992): The lexical semantics of verbs of motion. In: Roca, I. (ed.) Thematic structure: its role in grammar. Berlin/New York. S. 247-269.
- Nedjalkov, V. P. & Jachontov, S. Je. (1988): The Typology of Resultative Constructions. In: Nedjalkov, V. P. (ed.): The Typology of Resultative Constructions. Amsterdam/Philadelphia.
- Rapp, I. (1995): Partizipien und semantische Struktur. Tübingen.
- Thieroff, R. (1992): Das finite Verb im Deutschen. Tempus-Modus-Distanz. Tübingen.